

旧村川別荘だより



平成 23 年 4 月 11 日発行
 旧村川別荘市民ガイド事務局
 我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課
 歴史文化財担当：岡村、辻、工藤
 〒270-1166
 我孫子市我孫子 1684 番地
 TEL:04-7185-1583 (直通)
 E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

月例会が開催されました。

4月の月例会が行われました。あの大きな地震後、初めて集まりました。

みなさまにおかれましては、いかがでしたでしょうか。家屋、家財、御親戚など被災のあったみなさまには、心からお見舞いを申し上げます。

大変な状況とは存じますが、力を合わせて復興に向かっていきましたらと思います。

幸い、旧村川別荘では大きな被害がなく、ほっと胸をなでおろしているところです。

そして、現在見合わせております公開も、**4月16日(土)から再開**することとなりました。

また、みなさま方のご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

学校制度について

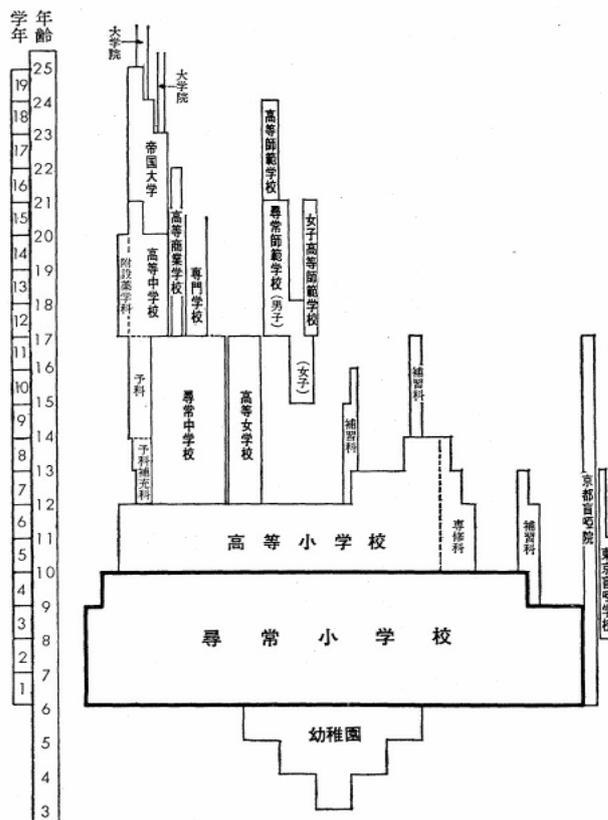
○ 江戸時代の学校制度

江戸時代の学校制度は初等教育として「寺子屋」(庶民)と「藩校」(武家)があり、「よみかきそろばん」や儒学を教えていました。また高等教育として幕府が設けた「昌平坂学問所」「洋書調所」「種痘所」があり、儒学、洋学、医学のエリート層を養成していました。寺子屋には幕末で75歳の子供が通い、諸外国に比べて教育水準が高く、文明開化にも適応できる人材が育成されました。

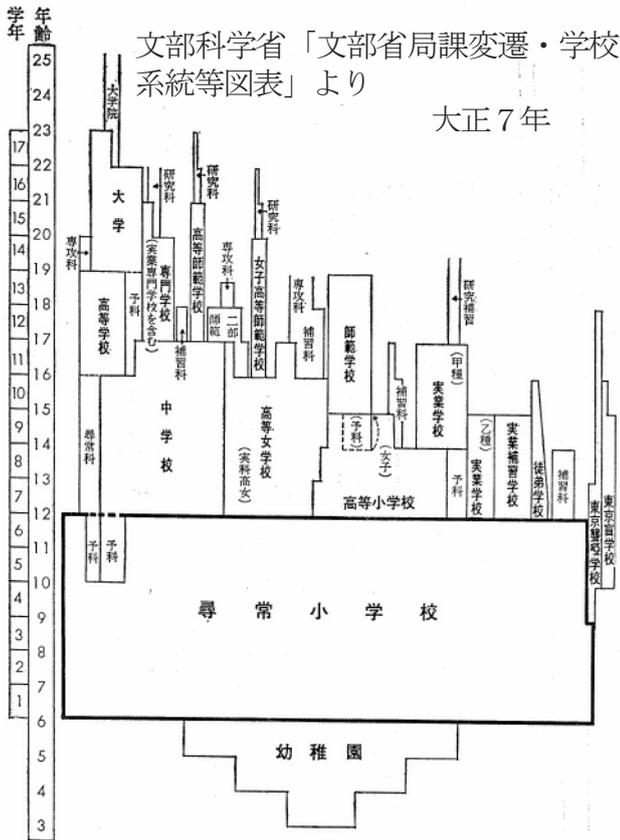
○ 明治時代以降の学校制度

明治5～12年にフランス流の「学制」が敷かれ、各地に小学校、中学校が設けられ、最高学府として「東京大学」が設けられました(明治10=1877年、それまで大学南校や東校と呼ばれたものを再編)。「東京大学」は法・理・文・医の4学部からなり、嘉納治五郎は「東京帝国大学」ではなく「東京大学」を卒業しています。外国語で講義が行われたため、語学を学ぶための「大学予備門」が作られ、夏目漱石・正岡子規など多くの秀

第3図 明治25年



才を集めます。その後、「学制」はアメリカ流の「教育令」によってかわられ、さらに明治19(1886)年には文部大臣 森有礼が「小学校令」「中学校令」「帝国大学令」と次々に教育改革をおこない、「東京大学」は工部大学校を吸収し「帝国大学」と改称します。大学予備門は廃され、全国に5つの「高等中学校」が置かれます。ちなみに村川堅固は明治8年うまれて、村川夏子さんによると「明治21年から28年までの7年間、第五高等中学校(熊本)に在学した」とありますので、尋常中学校に1年通った後、第五高等中学校の予科補充科に通われたのかもしれませんが。明治27年には高等中学校は高等学校(以下、旧制高校)と改称し、明治30年には京都帝国大学が開学したため、晴れて「東京帝国



大学」となりました。全国の旧制高校卒業生数は同じ年齢男子のわずか0.1%、各帝国大学の学生数とほぼイコールだったので、大学と学部を選ばなければ帝大生(ということは明日は博士か大臣か)になれる旧制高校生は超エリートであり羨望の的でした。弊衣破帽^{パンカラ}などの奇行も国家を担う若者として寛容されていました。大正7(1918)年の「大学令」で早稲田・慶応・明治なども晴れて大学として認められました。

旧制高校は7年間の「教養主義」を柱とし、帝国大学の高度な専門性と相まって、日本の政治・経済・文化の担い手となりました。ただし昭和期にエリート層が再生産されるような閉塞状況が破滅的な戦争を招いたという批判もあります。

現在の大学は実学(特に就職に活かせる資格取得)に大きく舵を切り、全ての学問の基礎として修めべき哲学や論理学などは切り捨てられ、学問は細分化する傾向にあります。今日の原子力災害を見るにつけ、今こそ旧制高校的な教養主義を再び評価すべきではないでしょうか。

連絡・意見交換など

- 旧村川別荘の再開について
- 4月16日(土)から再開します。

- 以前どおり16日からガイドのご協力をお願いいたします。
- 市民活動フェア(矢野さん、瀬戸さん、染野さん、青木さん、遠藤さん)
- 今度の市民活動フェアは、時期を変えて6月18日、19日の土日になります。
- 直近では4月11日、25日に実行委員会の会議があります。
- 内容については、前回までの内容を踏襲する形でひとまず提出することになりました。(ガラスケースの展示、DVD上映(活動状況の紹介)、あびこガイドクラブさんとのコラボレーションによるミニツアー)
- ひと工夫ができないか、上映やミニツアーなどはずっと同じ内容なので、次回の打ち合わせまでにメンバーでアイデアを持ちよることとなりました。
- 旧村川別荘に関するクイズとか個性あるガイドが分かるようなパネル展示などはどうかとの提案も出されました。
- 時期を合わせて文化・スポーツ課で旧村川別荘での企画展示を行えるよう検討を進めることとなりました。
- 11日は矢野さんと瀬戸さんが出席してください。
- 次回のメンバーでの打ち合わせは17日(日)午前10時となりました。
- 川瀬巴水展のチケット払い戻し(吉澤さん)
- 川瀬巴水展が、地震の影響により中止となりましたので、前売り券について、チケットと交換へ返金をしていますので、購入された方はご連絡ください。(吉澤さん04-7184-2856)

3月の来荘者数

平成23年3月は、1,208人でした。
 ちなみに 平成22年3月：1,380人
 平成21年3月：2,405人
 平成20年3月：435人

次回の月例会は・・・

平成23年5月1日(日)9時半から、旧村川別荘新館で行います。(^^)

旧村川別荘だより



平成 23 年 5 月 10 日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
千葉市教育委員会 文化・スポーツ課
歴史文化財担当：辻、工藤
〒270-1166
我孫子市我孫子 1684 番地
TEL:04-7185-1583 (直通)
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

月例会が開催されました。

5月の月例会が行われました。さわやかな初夏の風を感じるこのごろとなり、地震後の復興の気持ちの表し方も変化してきていることを感じます。

そのためもあってか、散策の人も増え、始まった駅からハイキングの効果もあり、村川へのお客様も増えています。

また、今後ともみなさまがたのご協力をお願いいたします。

村川堅固の提言「住食衣主義を提唱す」の発見について。

○ 村川堅固が「衣食住」ではなく「住まい」を尊重した「住食衣主義」を提唱していたことが、村川夏子さんの証言などで明らかになっていました。しかし、いつ、どこで、どのような内容の提言であったのかは不明でした。現在、旧村川別荘で文化財展「我孫子の別荘人」を企画しており、第一回ということで「嘉納治五郎」を取り上げようと、資料を当たっていました。その際に、『嘉納治五郎著作集』を読み直したところ、嘉納が大正時代に刊行した雑誌『大勢』に村川堅固の文章が掲載されていることが判明しました。

○ そこで早稲田大学図書館に収められている『大勢』とその先行雑誌『有効乃活用』『柔道』を当たったところ、目的の文章以外にも村川堅固が執筆した文章が何編か掲載されていました。そのうちの一遍が「住食衣主義を提唱す」だったのです。

○ 講道館の機関誌は明治31年に『国土』として刊行し、大正4年に『柔道』、大正8年に『有効乃活動』と改称、大正11年に『大勢』と『柔道界』に分割されました。『大勢』は

その後しばらくして廃刊となりますが、『柔道界』は『柔道』、『作興』と改称し、昭和5年に再度『柔道』となり現在に至っています。

○ 村川堅固が執筆したのは『国土』『柔道』『有効乃活動』『大勢』においてです。この段階までの紙面構成は柔道のみならず世界情勢、政治、科学、医学、歴史、教育、文学など多岐にわたっており、執筆陣も大学教授や作家などその当時一流の人々をそろえています（例えば、『大漢和辞典』を編さんした諸橋轍次、『大日本地名辞書』を編さんした吉田東伍の名も見られます。）

○ 嘉納治五郎は「精力善用」「自他共栄」を格言としています。柔道以前の柔術には「柔よく剛を制す」という理論（「やわら（柔）」という）があったが、嘉納はこれを発展させ「自己の内にある心身の力を最大限に有効に活用しものごとに当たる」ことが柔道のみならず社会生活の根本原理である、と説き、「精力善用」と唱えました。またその結果を自己の利益とするだけでなく、相手を敬い、共に社会の進歩へと活かすべきであると唱え「自他共栄」と唱えた。「精力善用」し「自他共栄」するためには幅広い知識や教養、哲学が不可欠であり、古今東西の様々な内容を取り上げた講道館の機関誌編集方針は、嘉納の思想が反映されたものと言えるでしょう。

○ 村川堅固が『大勢』第一巻第四号（大正11年7月＝1922年刊）に書いた「住食衣主義を提唱す」の内容を示すと、

①日本の住宅事情の貧弱さが国民の生命・財産・安全を損ねている②国民は見栄えの良い衣服や嗜好品に金をかけるが住宅

建築には多額の費用がかかるため、なかなか気持ちの良い住宅を建築しようとしないう③最近では世界大戦で破壊されたヨーロッパで巨額の費用をかけずに気持ちの良い住宅を建築する住宅政策が行われ、わが国でも住宅問題の研究が行われるようになった④国民が住宅を重視する姿勢をもち、不必要な衣食に割く費用を住みよいまちや住宅を作る政策のための公債購入に当てれば、重税を課さなくても住みよい住宅を作ることは可能である、ということになります。

- 村川堅固が文中で触れているように、『大勢』の前号に渡辺鏡蔵（明治 18＝1885 年広島生まれ。広島一中から一高を卒業後、東京帝国大学法学部を首席で卒業し、東京帝国大学法学部・経済学部教授。戦後東宝社長となり、東宝争議に対して厳しい姿勢を取ったことで知られる）が欧米の進んだ住宅政策について述べており、堅固の文章はこの考え方を発展させたものと言えます。
- 村川堅固はこの文章で「大切なのは、国の施策を実現するためには個々の意識改革が必要だと」訴えています。自身が明治 43（1910）年に目白の本宅を作り、大正 10（1921）年に旧村川別荘の母屋を作っている。この文章を書いた頃と同時期であり、かれが体験をふまえ、住みよい住宅を作ることを広く訴えようとしたものと考えられます。
- このほか『柔道』第三巻第三号（大正 6 年 3 月＝1917 年刊）は嘉納の方針で「勉学号」と名づけられ、嘉納が「学校の試験と社会の試験」、村川が「学生の勉学精神について」という文章を書いています。村川は「試験をパスするため、親の期待にこたえるためではなく、自分の実力養成のために勉強するのだ」という自覚を持つことが大切であり、将来の自分や国家のためにも必要である」と説いています。（ちなみにこの号で「青淵翁の学生今昔評」というコラムを書いているのは渋沢栄一です。渋沢さんは「学問が分化した現在、

明治維新の頃のような混沌とした状況ではないのだから、むやみに昔の学生と今の学生を比べるのは気の毒だ、と書いています。渋沢栄一は「道徳経済合一説（経済人は儲ければよいというのではなく、儲けを社会や学問などに還元すべき）」をとり、発想として「自他共栄」の嘉納に共感していたのかもしれない。嘉納の幅広い付き合いを示す上でも注目されます。」

- 村川堅固は東京帝国大学教授という立場上、国家の要請に応えるべく西洋古代史の研究にいそしみました。執筆されたものは一般人から見ると、難解かつ専門的な論文が主です。インテリジェンスを担う東京帝大教授としては当然のことです。しかし人生の師である嘉納のもとで書いた文章は彼の生活や日々の思考から導き出されたものであり、自由さを感じます。学者ではなく、明治の知識人としての村川堅固という人となりを知る上で重要なものであると思われます。

連絡・意見交換など

●村川での昼食休憩について

- ・たくさんの方がお弁当を広げて食事をとるとにおいなどが部屋にこもり、後から見学に訪れたかたが気になります。
 - ・積極的に昼食休憩を進めることはやめたほうがよいような気がします。
- 積極的にということではないですが、村川を少しでも活用していくという大きな視点の中で許容範囲に含めているものです。昼食をとられたあとなどは、空気の入替えをするなど対応することにしたいと思います。

4月の来荘者数

平成 23 年 4 月は、164 人でした。
 ちなみに 平成 22 年 4 月：635 人
 平成 21 年 4 月：584 人
 平成 20 年 4 月：280 人

次回の月例会は・・・

平成 23 年 6 月 1 日（水）9 時半から、
 旧村川別荘新館で行います。（＾＾）

旧村川別荘だより

51

平成 23 年 6 月 15 日発行

旧村川別荘市民ガイド事務局

我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課

歴史文化財担当：辻、工藤

〒270-1166

我孫子市我孫子 1684 番地

TEL:04-7185-1583 (直通)

E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.

月例会が開催されました。

6月の月例会が行われました。例年にない早い梅雨入りで・・・歩く方のためには少しだけがっかりですが・・・それでも（毎年言っているような気もしますが）雨の村川がとても好きなので、これはこれでよいかと思ったりしています。

我孫子の別荘人シリーズ その昔 嘉納治五郎の巻

●教育を創った男

嘉納治五郎は万延元（1860）年、摂津国御影村（現在の兵庫県神戸市東灘区）に生まれました。生家は醸造家でしたが、父が廻船や貿易の実績を見込まれて明治政府に出仕したため、明治3（1870）年、嘉納も東京に移り住みました。私塾で漢学のほか英語、ドイツ語などを学び、明治8（1875）年、開成学校に入学、10年には開成学校が東京大学と改称され、理財学（経済学）と政治学を修めました。当時の東京大学は唯一の大学として全国から秀才が集い、お雇い外国人が外国語で講義を行っていました。大学卒業後、学習院教授、第五高等中学校（後の第五高等学校、現熊本大学）校長、東京高等師範学校（後の東京教育大学、現筑波大学）校長を務めるなど、教育者としての道を歩きます。旧村川別荘を作った村川堅固も第五高等中学校で嘉納の教えを受け、東京帝国大学卒業後も秘書を勤め、師と仰ぎました。また国内に止まらず中国（清）からの留学生を受け入れるための弘文（宏文）学院を設け、作家の魯迅もここで日本語を学びました。

●柔道を創った男

嘉納は大学に進んだころから体力づくりのためベースボール（嘉納曰く「ピッチャア」だった）や隅田川でのボートなどに励みましたが、特に天神真揚流柔術、起倒流柔術に入門し、さらに研究して体系化し、人間教育にも寄与するとして「柔

道」と称し、明治15（1882）年、講道館を開きました。

柔道を特色付ける嘉納の言葉として「精力善用自他共栄」があります。「精力善用」とは「心身の力を効果的に使用すること」であり、「自他共栄」とは融和協調して人間と社会の進



歩に貢献することです。これは柔道の主理論でありながら、嘉納の教育の根本理論となっていました。

●海外への発信～日本文化のセールスマン

19世紀末のヨーロッパでは「ジャポニズム」と呼ばれる日本趣味が流行していました。外国語が堪能だった嘉納が柔道をヨーロッパに紹介したのはその頃で、護身術として流行しました。コナン・ドイルの「シャーロック・ホームズ」やモーリス・ルブランの「アルセーヌ・ルパン」にも柔道（柔術）を想起させる記述がみられます。国際柔道連盟規約第一条には「国際柔道連盟は嘉納治五郎によって創設された肉体と精神の教育体系を柔道と認める」と定められています。嘉納は国際オリンピック委員も務め、昭和11（1936）年には昭和15（1940）年開催予定の第12回オリンピックの東京開催と札幌での冬季オリンピックの招致に成功しましたが（いずれも日中戦争激化により中止）、昭和13（1938）年、帰国途上氷川丸船上にて逝去しました。

●別荘地我孫子の始祖

嘉納は明治44（1911）年、我孫子市緑1丁目に別荘、翌年、我孫子市白山に農園を設けました。

嘉納の別荘をかつて訪れたことのある方々によると「木造平屋で大きな松がそびえて



いた」「書生の方が番をしていて勝手に入ると怒られた」などの証言がありますが、どのような建物を建てていた

のかは不明な点が多いのが現状です。

我孫子での嘉納の様子を伝えるものとして、昭和13(1938)年に嘉納治五郎が亡くなった際に杉村楚人冠が記した追悼文があります(十三年集を参照)。嘉納の人間らしい一面を感じさせるものとして興味深いです。

旧村川別荘を設けた村川堅固は嘉納が我孫子に別荘を設けたことからここに別荘を設けたといわれます。また、村川より少し遅れて東京帝国大学に入学し、東京高等師範学校教授となった綿貫哲雄(嘉納の娘婿)も我孫子に別荘を構えていたことが村川家資料から明らかになっています(場所は不明だが後楽農園付近か?)。

●農場経営者

白山に設けた嘉納後楽農園は土地面積約5万5千㎡(東京ドームは4万6千㎡)、当時の上流階級では「農園付き別荘」という形態があり(那須には三島通庸、青木周蔵、山田顕義、大山巖、西郷従道、松方正義、品川彌二郎、鍋島直大など華族が広大な農場と別荘を設けた)、嘉納もそれに倣ったのではと考えられます。

近隣の農家が野菜と麦と米中心の経営だったのに対し、農園には技術者も配置し、米、麦、白菜、三つ葉、小松菜、ジャガイモ、さつまいも、インゲン、スイカ、えんどう豆、大豆、に

んじん、里芋、ネギ、とうもろこし、ブドウ、桃、トマト、うど、きゅうり、ナス、カボチャなどを栽培していました。豚も飼い、肥料も作っていました。特にカボチャは「栗南瓜 本種」は弊園独特の改良種にして、風味名称の如く栗の如



し「嘉納後楽農園」というラベルを貼って商品価値を高めて出荷していました。

後楽農園は嘉納が亡くなった後、昭和15

年に分譲地となり、東京からサラリーマン、学者など都市住民が移り住み、田園都市的な景観が現れるようになります。村川堅太郎とともに戦後の東京大学の史学を支えた西嶋定生も戦後ここに移住しました。いまでは、すっかり住宅となっていますが、ご存知のとおり道路際の桜の老木がその歴史を語っています。(18日から展示を開催します。ぜひご覧ください!!)



連絡・意見交換など

●川瀬巴水展のチケット

- 吉澤さんからチケットをお買い求めになって、まだ返金を受けていない方はチケットと交換になりますので、吉澤さんまでご連絡を。

●市民活動フェアについて(矢野さん、工藤)

- 資料に沿って当日のイベントの流れについて説明。

- ①DVD上映②ガイド付きミニツアー③村川での抹茶サービスとガイドパフォーマンス

→実施について了承されました。

- 参加費500円とお抹茶代+お菓子代が残金範囲内で支出したい。

→支出について了解されました。

- 17日の準備から18日、19日の当日の参加について、資料の枠ごとに募りました。

→お申し出いただいた方、本当にありがとうございました。

5月の来荘者数

平成23年5月は、587人でした。

ちなみに 平成22年5月：366人

平成21年5月：470人

平成20年5月：590人

駅ハイの威力はすごい!!

次回の月例会は・・・

平成23年7月1日(金) 9時半から、旧村川別荘新館で行います。(^^)

旧村川別荘だより

平成 23 年 7 月 11 日発行
 旧村川別荘市民ガイド事務局
 我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課
 歴史文化財担当：辻、工藤
 〒270-1166
 我孫子市我孫子 1684 番地
 TEL:04-7185-1583 (直通)
 E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.

月例会が開催されました。

7月の月例会が行われました。この日は、教育委員会から生涯学習部参事兼文化・スポーツ課長の深山も参加し、つぎのようなご挨拶を申し上げます。
 「かなり以前から旧村川別荘のことは知っていて、中を見学したことも複数回ありました。ここ何年かの旧村川別荘はかなり様変わりしました。ガイドのみなさんがいらっしゃって、文化財の案内をしてくださっている、いろいろなイベントも開催されている、人の手が入っている・・・こうしたことがいらっしゃるお客様には敏感に感じ取られていることと思います。元は別荘だったものが公共へ移ってその機能を失い、いったんは役目を終えたものが文化財として生まれ変わり、ガイドのみなさんの活動がこの建物に新たな息吹を吹き込んだように思います。どうか今後ともお力をお貸しいただけますよう、お願いいたします。」

杉村楚人冠の「船を掘りに」について

杉村楚人冠の随筆「船を掘りに」は大正13（1924）年8月に記されました。前年に関東大震災があり、杉村は別荘をもっていた我孫子に移住した初めての夏の頃に起きた出来事でした。

●事件のおこり

我孫子駅前で模造埴輪を作っている「勘兵衛さん」が「船を掘りに行きませんか？」と杉村を誘うところから物語りは始まります。杉村はいふかりながらも、大地震で沼の湖底がかき回されて（隆起か？）沈んでいた昔の丸木舟が沼のあちこちで姿を現したことを知り、友人で船の研究をしていた西村真次に声をかけ、勘兵衛さんの教えてくれた船を見に行くことにしました。

●西村真次という人

西村真次は明治12（1879）年生まれ。作家

を志し東京専門学校に入学するも、日露戦争に輜重兵として出征（外国に行ってみたかった？）、帰還後に東京朝日新聞社に入社します。生物学、人類学、考古学、民俗学など様々なことに造詣が深く、「文化人類学」という言葉を初めて使った人です。のちに早稲田大学教授となり博覧強記ぶりを発揮しましたが昭和18年に亡くなりました。研究分野が余りに広く、戦中に亡くなったため評価が余りなされていないのは惜しいことです（息子は海洋民族学者の西村朝日太郎。朝日時代に生まれたから？）。

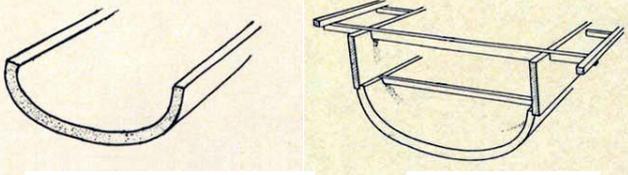
●事件のゆくえ

岡発戸、滝前（東我孫子南側）、岩井、鷺野谷などで次々に長さ6メートルほどの丸木舟が掘り出され、杉村と西村コンビは船を求めて走り回ります。西村の見識眼では「古いものは2千年前のアイヌによるもの、新しいものは千年前のもの？」[新しいとしたものには金属の切削痕が残っている]などと分析しています。村人は「平将門の娘がこの船に乗って難を逃れた」とか「ヤマトタケルが手賀沼を渡ったときの御乗船だ」といった勝手な説明書きを立て「現代的な伝説」を作っている、と皮肉っぽく一連の騒動を結んでいます。

●よみがえった丸木舟

数年前、市民から「岡発戸新田の八幡神社」（天王台から南に直進し、ふれあいラインにぶつかった左側）の軒下に掲げられている「木片」はこの時のもので、縄文時代の丸木舟では？という質問があり、科学分析





丸木舟 (剝り舟)

準構造船

を実施しました。その結果、戦国時代の16世紀半ばのものと判明しました。丸木舟＝縄文というイメージですが、明治になるまでの和船は丸木舟に舷側板を打ち付けた「半構造船」であり、沈船になると時代の区別は付けづらいということです。それにしても金属の切削痕を見極めた西村の見識眼には驚かされます。

連絡・意見交換など

- 市民活動フェアについて(矢野さん、瀬戸さん)
- ・みなさまのおかげ様をもちまして、無事に市民活動フェアを終了することができました。ありがとうございました。

＜実績報告＞

18日(土) DVD: 19人

ツアー: 8人

お抹茶: 16人

19日(日) DVD: 18人

ツアー: 6人

お抹茶: 15人 でした。

- ・総じて、サービスの内容も考えるとちょうどよい規模でできたかなと思います。
- ・旧村川別荘の企画として、今回は新たにお抹茶サービスを行いました。こんなこともここでできるんだという発見と驚き、そして新たな魅力を認識しました。
- ・市民活動フェアの全体については、PRの方法に改善の余地を感じました。もっと早くからのPRも必要だったと思いますし、広報の掲載の仕方ももっと具体的でないと思集客力が出ないのではないかと思います。
- ・ポスターやちらしの印刷ももっと早い時期できると良いと思います。
- ・DVDはそろそろ一新したほうがよいのではないのでしょうか。女性のガイドさんなども中に入られるとなお良いと思います。

- ・ガラスケースの展示やお抹茶サービスのお茶椀、縁台などお骨おりにいただいて本当に感謝でした。

＜会計報告＞

前回報告済みの残金 : 8,933円

今回支出 お抹茶・お菓子 : 4,033円

フェア参加費 : 500円

差し引き残金 : 4,400円

(瀬戸さんより報告あり、記録済み)

矢野さんをはじめ、参加して下さったみなさま、本当にありがとうございました！！



●竹灯籠の夕べ

- ・9月10日(土)、11日(日)に開催予定としました。

・御協力をお願いいたします。

・工事はちょうどそのあとから入るような形です。

●『あびこ歴史散歩』

- ・散策をする方々に手に持ち読みながら史跡めぐりをしてもらうことができるよう作成しました。
- ・ガイドさんたちにも1冊ずつ、お配りします。
- ・旧村川別荘にも配布用においていますが、アビシルベをはじめ、アビスタ、湖北地区公民館、閤行政サービスセンター、市役所、白樺文学館、教育委員会などで無料配布しています。
- ・御入り用がありましたらぜひお声かけください。御友人など我孫子に招かれることがあれば、ぜひご活用ください。

6月の来荘者数

平成23年6月は、694人でした。

梅雨入りにも拘らず大勢のお客様がおいでくださいました！

ちなみに 平成22年6月: 495人

平成21年6月: 293人

平成20年6月: 205人

次回の月例会は・・・

平成23年8月1日(月) 9時半から、旧村川別荘新館で行います。(^^)

旧村川別荘だより

平成 23 年 8 月 10 日発行
 旧村川別荘市民ガイド事務局
 我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課
 歴史文化財担当：辻、工藤
 〒270-1166
 我孫子市我孫子 1684 番地
 TEL:04-7185-1583 (直通)
 E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.

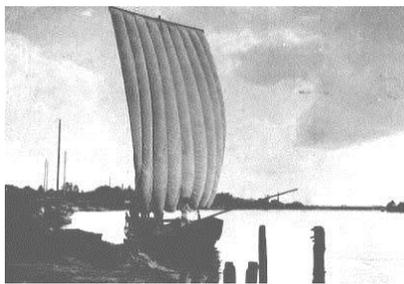
月例会が開催されました。

8月の月例会が行われました。思ったほどに暑さはなく、涼しげな風が吹く別荘にて、避暑的(?)月例会が行われました。秋までもうひといき。虫よけを忘れずに、御協力をお願いいたします。

布佐の水害について

● 利根川東遷と江戸時代の布佐

江戸幕府は新都会の江戸を経済的に支えるため、江戸近郊の河川を付け替えて運河として整備しました。現在の利根川はもともと常陸川や広川と呼ばれ、茨城県古河付近を水源とする中小河川でしたが、荒川水系の川を工事で付け替え、現在の姿になったのです。これにより銚子～関宿～日本橋が水路でつながり、安定した物資輸送が可能となりました(利根川東遷=この目的は江戸を洪水から守るため、という説は明治の治水学者が自分の研究の正当性を高めるために言い出した説です。いつでもいるんですね…)この事業により利根川には数百石を積載する高瀬船(大型帆船)が行き交い、川ぞいには多くの港(河岸)が作られ繁栄します。布佐もその一つで、18世紀半ばに銚子沖で漁場が開発されてからはサバやイワシなどの魚を布佐で馬に積み替え、松戸までノンストップで輸送する「なま街道」の起点として繁栄しました。



国道356号線沿いにある布佐の延命寺から都交差点にかけて存在した布佐河岸(現在は治水工事のため、利根川の堤防下)には、共同船着き場「出しの鼻」、荷揚げ場、河岸問屋、宿屋、湯屋、飯屋、船大工などが集結していました。当時の繁栄を偲

ばせるものとして毎年9月に行われる竹内神社例大祭があります(今年は震災の影響で中止)。

このため、布佐の人々は洪水のリスクがあると分かっているにもかかわらず、河岸の付近で暮らしました。

● 河岸の衰退と洪水との戦い

明治前半までは利根運河の開通に象徴されるように利根川は東京を支える動脈として使用され、利便性を考え、堤防は低いままに残されました。記録に残る大洪水は20年に一度起こりました。

<明治3(1870)年> 旧暦7月19日、布佐西町の堤防が決壊。堤防内外の住居数十棟を押し流し、一部が「切所沼」として昭和27年に埋め立てられるまで残る=今年の大震災で液状化!

<明治23(1890)年> 8月下旬、手賀沼と利根川の合流点(六軒)の堤防が決壊、収穫前の手賀沼沿いの水田が多数押し流された。

<明治43(1910)年> 梅雨以来の長雨に8月に2つの台風が相次いで上陸、利根川が大増水。布川の堤防が決壊し、布佐は洪水を免れた。

→これ以降、堤防のかさ上げが進み、利根川からの洪水は抑えられましたが、逆に手賀沼の排水が進まず新たな洪水の危機を迎えました。手賀沼の治水をかねて埋め立て計画が起こり、手賀沼保勝会が結成されたのもこの頃です。

<昭和13(1938)年> 6月下旬の大雨と台風で相島新田～布佐駅付近が浸水。340軒が浸水

<昭和16(1941)年> 7月下旬の大雨と台風で手賀沼が洪水。新木～布佐までの低地が被害。

→戦後は印旛沼手賀沼国営干拓事業が発足、手賀沼土地改良区とともに手賀沼排水機場が設置され、手賀沼による洪水の恐れは低減することとなりました。洪水を防ぐ堤防が逆に洪水を起す原因となるのは皮肉なことです。また、どんな災

害が起きて、暮らしのためにその場を離れず生活復旧するたくましい市民の姿は、先日の大津波・大震災とその後の人々に重なります。

連絡・意見交換など

●スニーカーの間違い（矢野さん）

- ・7月10日（日）に、帰ろうとしたら自分のスニーカーがなく代わりにこの黒いスニーカーがありました。
- ・その日は8人ほどの方がお見えになりましたが、お客様の中で間違えられた方がいたようです。
- ・矢野さんが預ってくれていますので、何かご連絡のあったときには、連絡を。

●展示の提案（佐久間さん）

- ・村川別荘の中で、我孫子の歴史のことが語れるようなことができるとういのは、
 - ・この部屋を活用して、出土遺物だとかレプリカ、古墳時代のことから現在にいたるまでのことをご紹介できるような要素が少しでもあるといいのかなと思います。
 - ・村川別荘を我孫子の歴史のミニ博物館のような形で発信できたらと。
 - ・植物のことを聞かれることが多く、ガイドのみなさんのなかで気持ちのあるかたなどがいらっしゃれば、特に植物のことを私でもいいのですが、一緒にトレーニングをして、植物をテーマにした児童や生徒向けの学習の場が提供できたらと思いました。
- 佐久間さんと相談して、今後展開していきたいと思います。みなさまこころの準備を！

●J-COMの放送（吉澤さん）

- ・7月18日から24日まで、J-COMの「ちばこれ！」で我孫子の景観が取り上げられました。
- ・村川も杉村も、教育委員会の計らいで撮影をもらい、とてもよいものになっています。
- ・ここにDVDを持ってきましたので、希望の方はぜひご覧ください。

→教育委員会でしばらくお借りして貸出し役をします。ご希望の方はご連絡ください。

●竹灯籠の夕べ

- ・9月10日、11日で実施します。

- ・18:00から20:00くらいで実施予定です。
- ・2時間くらいのこまでみなさまにもご協力をお願いしたいと思います。

- ・楽器の演奏も現在調整中ですが、わかり次第お知らせしていきます。

→決定！10日（土）お琴の演奏

11日（日）コカリナの演奏

※両日通してスライドの上映、昔の村川の様子などを流す。

●村川の工事について

- ・9月の末に事業者を決定、10月半ばごろから足場を組んだり、材料を搬入したりとになっていくので、そのあたりからしばらく閉館する予定です。
- ・閉館中は、月2回程度をめやすに月例会と勉強会、工事中の現場見学会や市外への件風なども行っていきたいと考えています。

●団体さんの来荘（田中さん）

- ・先日下見にいらした方があります。
- ・万歩会という団体さんで、10月29日（土）の予定。人数をお尋ねしたのですが、たくさんという以上にはわからないということでした。
- ・いずれにしても事前に教育委員会へのご案内しました。

→適切なご対応をいただき、ありがとうございます。時期によっては微妙になってくることもありますし、10月くらいから工事になることは伝えていただいてもOKです。教育委員会へ聞いてもらうようご案内ください。

7月の来荘者数

平成23年7月は、229人でした。

ちなみに 平成22年7月：113人

平成21年7月：221人

平成20年7月：308人

次回の月例会は・・・

平成23年9月1日

（木）9時半から、
旧村川別荘新館で
行います。（^^）



旧村川別荘だより



平成 23 年 9 月 20 日発行
 旧村川別荘市民ガイド事務局
 我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課
 歴史文化財担当：辻、工藤
 〒270-1166
 我孫子市我孫子 1684 番地
 TEL:04-7185-1583（直通）
 E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.

月例会が開催されました。

9月の月例会が行われました。いくつかの調整が行われました。まだまだ、蚊の猛攻もあるようですが、仲よくされている(?) つわもののガイドさんに励まされつつ、秋の村川の訪れを待ちたい今日この頃です。

杉村楚人冠邸の公開に向けて

現在、公開に向けた準備を進めている楚人冠邸の準備過程における状況をご紹介します。

●杉村邸の整備に至る過程

①明治から大正・昭和にかけて活躍したジャーナリスト杉村楚人冠が居住した住宅であり、多くの書籍・書簡・家具調度類が残される。多くの文人たちとの交流を物語るほか、杉村の著作「湖畔吟」に描写された自宅の様子を裏付ける資料が残っている。

②大正から昭和初期の和洋折衷式文化住宅（母屋）、蔵、茶室、澤の家の4棟が残される。

③庭は最盛時（2万平方メートル）に比べると四分の一（5千平方メートル余り）ほどになったが、楚人冠が植えた樹木（椿、梅など）が残され、湧水が流出している。

→整備コンセプト：杉村邸に残された資産を活かし、大正から昭和初期の文化人の邸宅と庭を整備し、資料を展示して杉村と当時の我孫子について広く市民に知っていただくようにする。

●杉村邸の現況と整備作業に向けての準備

①母屋は建てられて90年近くたっているので、外観を目視するだけでも腐朽が進んでいる。澤の家は屋根が抜け落ち崩壊寸前、茶室はハクビシンにより内部を破壊。蔵は落下した枝で瓦が破壊。



②母屋に所蔵されていた

書籍・書簡・家具調度類は雨漏りや湿気からカビ、虫害に遭っているものが目立つ。

③邸内は樹木、竹が繁茂している。特にモウソウチクの進



出はすさまじく、樹木が枯死し、澤の家まで及んでいた。また伐った樹木や枯れ木がそのまま放置され、シロアリの巣窟となっていた。

→まず③の邸内の樹木、竹を整理する。その後、①を直す整備工事に先立ち、②書籍・書簡・家具調度類を搬出し、整理する。

→埋まっていた池付近の水路を確認。杉村邸の設計者が下田菊太郎（下）であることが判明、設計当初の図と思われる図面も含まれていることが分かった。また杉村家に残された帳簿類、写真類からおおよその建物変遷が判明。昭和4年に大規模な改修工事を行っている。

●建物の庭園の整備

平成22年秋から建物と庭園の整備を進める。

建物は工事着手してからすぐに目視よりさらに腐朽が進んでいることが判明。

①増築した箇所「雨じまい」が悪く雨水の処理が不完全・樋が落ち葉で詰まり、壁や柱・土台に浸透し腐朽の原因となっていた。特に「中庭」と「サロン」～下田菊太郎の設計がアメリカナイズされているため軒の出が浅く雨に弱い。家族の要望から建物や施設の増築をしているが、計画に無理があったり、大工の腕が伴っていないケースも。
 →文化財審議委員と協議。創建当初の設計プランに戻すとすぐに腐朽してしまう可能性が指摘され、昭和4年の大改修工事の時点におおよそ合わせる事により、下田の当初プランと杉村の意思による作りこみのバランスが取れるの

ではないか、ということになった。

→創建当初は台所と、サロン南側のベランダはコンクリートタタキの土間であったことが判明。ベランダは木部の塗装が「外仕様」であることと符合し、下田がアメリカから持ち込んだスタイルか？楚人冠は寒さ対策のため床を張って「屋内化」している。

②茶室は沼への眺望を意識して台地先端部に設置されているが、沼に向かって建物が傾斜している。このため柱に傾きが生じ、壁に亀裂や剥落が生じている。建物脇のイチョウの大木から大量の落ち葉と銀杏が落下し、建物を傷めている。

③澤の家は破損が著しく、予算的にも厳しいため、建物の構造や部材を正確に記録し、現在できる限りの保存修復工事を行い、本格的な復元は基金を募ってすすめることとなった。本体工事も23年度にスライドさせた。

④蔵は家具調度類の収納スペースとするべく、蔵本来の使用に堪えるように修復することとなった。

⑤庭園は公園緑地課にて外柵を設置する。また、園路を整備し、散策できるようにするが、いわゆる普通の公園のように砂場やブランコがあるのではなく、あくまでも楚人冠の庭として整備する。

→整備と並行して、建物4棟は「杉村楚人冠記念館」、庭は「杉村楚人冠邸園」として都市公園条例に定め、「記念館」は有料入場施設、「邸園」は時間を定めた上で無料となる方向ですすすめることとなった。

●今後

11月1日開館予定！11月23日（祝）には記念講演会を開催いたします。ぜひご来場を。

連絡・意見交換など

●竹灯籠の夕べについて

- ・9月10日、11日で実施します。
- ・18：00から20：00で実施予定です。
- ・2つのこまで、みなさまにもご協力をお願いしたいと思います。
- ・楽器の演奏は、10日（土）お琴の演奏
11日（日）コカリナの演奏 になりました。
- ・両日通して、村川家の残されていた古い写真など

を使用して、スライドの上映、昔の村川の様子などを流す予定です。

- ・10日の16時から矢野さん、染野さん、荒井さん、遠藤さんが、18時半から遠藤さん矢野さん、澤田さん、日比野さんが、11日の16時から矢野さん、青木さん、荒井さん、瀬戸さんが、18時半から川端さん、鷺見さん、青木さん、大井さんが申し出てくださいました！ありがとうございます。

- ・もし、ご参加可能な方がいらっしゃいましたら文化・スポーツ課までご連絡ください。

- ・女性の方は（男性の方ももちろん！）よろしかったら、和服でおいでください。力仕事からの免除と、受付嬢の業務が待っております（^^）

→無事、開催されました！！二日間で862人のご来場をいただくことができました（^^）

●旧村川別荘の工事と休館について

- ・今月末に事業者が決まり着手することとなります。
- ・おそらく10月下旬からは休館いたします。
- ・来月の月例会ではお知らせできると思います。
- ・11月から休館日をほかの白樺文学館や今度オープンする杉村邸と合わせる予定です。月曜日休、月曜が祝日の場合は翌平日がお休みということにしたいと考えています。こちらでも決まり次第お知らせします。たぶん休館になっているところかと思われま。

8月の来荘者数

平成23年8月は、190人でした。

ちなみに 平成22年8月：196人

平成21年8月：144人

平成20年8月：198人

このレベルを維持しているというのは、実はとてもすごいことだと思います。日頃の地道なガイドさん活動のおかげだと思います。

次回の月例会は・・・

平成23年10月1日（土）9時半から、旧村川別荘新館で行います。（^^）



平成 23 年 10 月 17 日発行

旧村川別荘市民ガイド事務局

我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課

歴史文化財担当：辻、工藤

〒270-1166

我孫子市我孫子 1684 番地

TEL:04-7185-1583 (直通)

E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.

旧村川別荘だより

55

月例会が開催されました。



10月の月例会が行われました。いくつかの調整が行われました。いよいよ工事に入るということで、また、休館日が未定であったことから、この時には念のため11月分のシフトについても確認いたしました。

→が、つい先ごろ工事の打ち合わせが行われ、11月1日から休館とすることになりました。

月例会ともう一度くらいの会合を月ごとに開いていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

大工 佐藤鷹蔵の横顔

平成19年の秋に、この旧村川別荘をある人物が訪れました。当番のガイドさんの日誌で、佐藤鷹蔵大工のご子孫の方とわかりました。これをきっかけにそれ以来、調査をされていて、すべてが分かったわけではなく裏付けもこれからのことですが、現段階での情報をかいつまんでお伝えしたいと思います。

鷹大工こと佐藤鷹蔵は、幕末の慶応3(1865)年3月11日に小熊仁吉の二男として我孫子宿に生を受けました。小さなころから家の事情で祖父母に育てられたという情報があります。その後、その事情も手伝ってか・・・明治14年、新木村の佐藤由蔵家の養子となり佐藤鷹蔵と名乗ることになりました。

鷹大工の仕事は、我孫子市内の民家をはじめ近在の社寺などの建築物と、われらがリーチの椅子などの家具製作まで多岐に亘りました。

鷹大工の建築の特徴は、力強い構造美にあります。建てられた民家、社寺などを見ると、どれも庇の出し桁の木柄は太く力感があり、頑丈に組み合わされ

た格天井は剛い印象です。

彼が手がけたものと言われるものに次の建物があります。久寺家の寶蔵寺の本堂、大工事の釣鐘堂、香取神社の前の本殿、興陽寺の札所、最勝院の札所、小池薬局の住宅(本町)、渡辺家住宅(寿)、飯泉家住宅(本町)などが挙げられます。また、杉村邸では、澤の家のほかに建てつけの家具などを作っています。そして、白樺派とのかかわりは欠かせないものですが、志賀直哉の書斎をはじめとして、三樹荘の書斎など、鷹大工の工房と白樺派の思想は、車の両輪のように民芸運動へのよきパートナーであったのだと考えられます。

佐藤鷹蔵の為人はどうであったのでしょうか。

鷹蔵は、結婚して3男5女に恵まれます。当時、住まいとしていたのは、「大黒屋」です。昭和2年の楚人冠の地図には、鉄道際に書かれているのがわかります。この大黒屋は、鷹蔵が4女誕生を記念して建てたものだそうです。そしてそこで、働き者の妻や娘たちが日用品の販売や下宿屋を営み、名人気質の鷹蔵を支えていました(この建物は昭和55年ごろに、区画整理事業によって解体されたそうです。)

鷹蔵は、職人のこだわりを持つ、口が重く頑固者であったそうです。背は高くなく、体つきはがっしりとして浅黒い風貌でありました。

意外なことに(?)新しもの好きで時計や自転車などに興味を持ち、特に時計はコレクションをするほどであったということです。

そうして、近代の我孫子の名工として活躍した鷹蔵は、多くの質実剛健な建物を遺し、昭和12(1937)年12月27日も終わりに近いころ、この世を去りました。72歳でした。

連絡・意見交換など

●杉村楚人冠記念館 オープンします！



- ・来る11月1日(火)午後1時から記念館がオープンします。ぜひ、おいでください。
- ・また、講演会を23日に開催いたします。こちらにも奮ってご参加ください！！

●旧村川別荘の休館日の変更と工事について

- ・先週、請負事業者が決定しました。これによると、今月末頃に、資材の運び込みなどが入りそうな具合です。臨時休館の開始は、11月1日(火)からとなりそうです(なりました!)。追って、決まり次第、旧村川別荘だよりなどでお知らせをいたします。
- ・旧村川別荘の休館日について、先だってよりお話ししていますように、月曜日に統一することが正式に決定いたしました。11月1日から変わります。ちょうど工事による休館と重なりますので、工事明けからこれによって動いていくようなこととなります。

●川瀬巴水の木版画展のお知らせ(吉澤さん)

- ・チラシをご覧ください。
- ・前回よりも長期間の設定となりました。
- ・チケットは1回買えば毎日見に行くことが可能ですので、ぜひ、ご来場ください。
- ・林望さんの講演会は抽選となりますので、ご注意ください。

●景観散歩のご案内(吉澤さん)

- ・チラシをご覧ください。
- ・景観散歩横浜篇を行います。

- ・また、若干の空席がありますので、よろしければどうぞご参加を。

工事により休館します

今回の台風で落下した屋根の銅板

かねてより
お知らせしておりました工事による休館が決まりました。11月1日(火)から2月下旬までの予定で休館いたします。

この間、ガイドのシフトはお休みになりますが、月例会にプラスして月に1度程度の会を催して、工事の進捗状況や現場見学なども含めて、さらにガイドスキルを深められる機会にしていきたいと考えています。



9月の来荘者数

平成23年9月は、1,021人でした。

ちなみに

平成22年9月：913人
平成21年9月：1,672人
平成20年9月：978人



▲写真撮影：矢野正男さん

竹灯籠の夕べはやはり集客力がありました♪



▲写真撮影：海老原修さん

次回の月例会は・・・

平成23年11月1日(火)午後1時半から、**杉村楚人冠記念館**で行います。(^^)大変恐れ入りますが、入館してギャラリートーク付で中を見学する予定ですので、入館料300円をご用意ください。

平成 23 年 12 月 7 日発行

旧村川別荘市民ガイド事務局

我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課

歴史文化財担当：辻、工藤

〒270-1166

我孫子市我孫子 1684 番地

TEL:04-7185-1583 (直通)

E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.

旧村川別荘だより

56

月例会が開催されました。

11月の月例会が行われました。1日は杉村楚人冠記念館のオープンの日ということで、みなさまにご来館をお願いいたしました。

お越しいただき、本当にありがとうございました。ご都合がつかなかった方は、ぜひ、次の機会の時においでください！



杉村楚人冠記念館オープン！

杉村楚人冠は明治から大正、昭和初期にかけて活躍した国際的ジャーナリストです。明治45(1912)年に我孫子に別荘を設け、「白馬城」と名付けた楚人冠は、東京大森の自宅から週末毎に通って来ていました。

現在、楚人冠邸内に残る最古の建物「澤の家」(大正11年建築)は別荘時代の面影を残す建物です。昭和末期になってから痛みが激しくなり、



ほとんど崩れていたものを、今回の修理で屋根と柱を中心に復旧しました(文化財保存基金で本格的修理を目指



します)。「なんでこんな崩れた家を直すの?」と通りがかりの人たちに聞かれましたが、澤の家に立ってみるとその重要性に気がきます。もう少し西だと湧き水の影響を受けるし、東だと沼が見えない…ここはかつての杉村邸の「扇の要」にあり、今は見えなくなってしまった手賀沼を借景にして、自分の好みの庭を眺めるのに最適な位置にあるのです。



楚人冠に大きな転機が訪れたのは大正12(1923)年の関東大震災です。息子2人が入院していた病院が倒壊、帰らぬ人となり、傷心の



楚人冠は一家を挙げて我孫子に移住することになりました。大正13年、アメリカ帰りで耐震構造に明るい建築家、下田菊太郎に母屋の設計を委託しました。サロンと呼ばれる洋館部分の軒の出の浅さ、現在は屋内に取り込まれているベランダ、丈夫なトラス構造を採用した屋根などに下田の影響が見て取れます。ところが下田の仕事に対する姿勢に疑問をもった楚人冠は下田を解任、間に弁護士を立てて調停してもらったようです。設計や施工の下手際もあったらしく、引っ越し直後から改修を始め、大正14年には2階建て書斎を増築、昭和4年には屋根や壁の大改修工事を実施しています。母屋の修復に当たっては、下田の現設計に杉村の意思が反映された、昭和4年当時の姿を念頭に置いています。家の中の家具は作り付けのものが多く、もう二度と地震で家族を失うまい、という楚人冠の強い意志を感じます。

修理を担当した者として、最も印象が強いのは母屋の2階建ての書斎です。ここは北向きで、増築するため接合した部分の水回りが悪く、壁内部の柱が2階まで腐っていました。大量の書籍や家具を運び出し、床をはがし、柱をジャッキアップして土台を交換、外装の下見板張りを復活させ、内装は左官屋さんに漆喰で仕上げてもらいました。北向きの書斎に午後の柔らかな光が入り、白い漆喰壁で反射して、何とも言えぬ落ち着いた雰囲気を作り出しています。声や音も柔らかく反射し、思索にふけるのに最適な場所に仕上がりました。手のかかる子ほど愛おしい…よく言ったものです。



そして、建築士でもなく、歴史が大好きな一市職員にしかすぎない自分が、行きがかり上？監督職員となって工事を見守り、決断し、そしてこれまで経験したことのないプレッシャーのもとオープンにこぎ着けられたのは、多くの市民や杉村家が温かく見守って下さったからだと思います。100年かけて積み重ねられた思いを次の100年につなげられれば文化財担当として幸せなことはありません。



次はいよいよ旧村川別荘です！頑張ります！

10月の来荘者数

平成23年10月は、553人でした。

ちなみに

平成22年10月： 639人

平成21年10月： 517人

平成20年10月： 752人

次回の月例会は・・・

平成23年12月16日(金)市川市へ市外
研修に行きたいと思います(^^)奮って
ご参加を！

平成 23 年 12 月 21 日発行

旧村川別荘市民ガイド事務局

我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課

歴史文化財担当：辻、工藤

〒270-1166

我孫子市我孫子 1684 番地

TEL:04-7185-1583 (直通)

E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.

旧村川別荘だより



月例会が開催されました。

今回の月例会は、市川へ市外研修に行きました。木枯らしが吹き、寒い一日なるかと思いきや、日の光が暖かく、参加者みなさまの心も温かく、よい散策日和でした。ご様子を次のようにお知らせいたします！

■午前10時にJR総武線本八幡駅に集合！



みなさま、時間通りに集合！今回は、人数が少なかったのですが、元気いっぱい出発！

■最初は、“八幡の藪知らず”へ。



古くから禁足地（入ってはならない場所）とされており、「足を踏み入ると二度と出てこられなくなる」という神隠しの伝承とともに有名。水戸黄門こと徳川光圀が当地に立ち入って迷い、ようやく出たという伝承から、方向を見失ったりすることを“八幡の藪知らず”というようになりました。このタブーの森の一角だけ出入りが許されている不知森神社にお参り。記念写真を撮りました。

■次に、葛飾八幡宮へ。

国の天然記念物の千本公孫樹が見事でした！紅葉の時期は過ぎているのですが、この千本公孫樹だけは見事な金色で輝いていました。



■いよいよ水木邸へ。

昭和のよき時代の香りがする落ち着いた平屋の住宅に、心遣いの表れているお庭の景色。とても落ち着くスポットとなっています。水木洋子サポーターの方々が、年末の大掃除もかねて邸内でかいがいしく働かれており、ガイドもしていただきました。



■水木洋子さんとツーショット！

菊池さんと水木洋子さんとのツーショットをぱちり（^^）いい感じです～♪



←水木風染野脚本家です

■その後、1キロほど歩いて適度におなかを減らし、おいしいランチをいただきました（残念ながらこのお料理の写実はありません・・・）。みなさん、ご満悦。

■東山魁夷記念館へ。



まるでドイツに来たような錯覚を覚えます。この記念館には、東山魁夷の為人に関する展示と、東山魁夷の絵画に触れる展示とがありました。ときまさに東山魁夷の絵の季節。幽玄の中に招じ入れられて、東山魁夷の世界に思いきり浸ることができました。ギャラリートークもとてもよく、もし、いらっしゃるときにはお聞きになることをお勧めします！我孫子的には、結城素明（杉村楚人冠の絵を描いた）が東山魁夷の恩師であり、その結城素明の言葉“自然は心の鏡”を終生大事にされたというエピソードが印象的でした。

■最後に中山法華経寺へ。



荘厳な山門。これを見上げ、くぐる・・・本当に厳かな気持ちになります。重要文化財などを見ながらお参りし、ガイドのみなさまのご健康とご多幸をお祈りしてきました。

このようなことで、無事に市外研修を終了できました。みなさま、ありがとうございました。次はどこがよいでしょうか。既にいただいているご要望もありますが、ご希望がありましたらお寄せください（^^）



旧村川別荘の今

11月から建築工事に着手しています。工事の一幕をご紹介します。



左の写真は、母屋の床の間ですが、落とし掛け（小壁の下部に架けられる横木のこと）がないのがわかりますか？実はこの落とし掛けは、2年ほど前に一度落下してい

ます。横木の木が湾曲し、切欠きのような継手ではまっていた右部分が外れて落ちたのでした。応急処置で凌いでいましたが、今回、きちんと直します。はずしてみたら、材がとても良いものだということが判明。おいおいご紹介もしたいと思います。残念ながら虫食い状況がひどく、元の材を再利用することは難しそう・・・。

右の写真は、出窓部分です。下がりかひどく、風が吹くたびに建具が外れてシルバーさんにさんざんご苦労をおかけしたのですが、これも、今回、全面解体修繕です。



新しく元の姿を取り戻すために、旧村川別荘もがんばっています！年明けには、庭部分の工事も始まります。みなさま、見守ってください。

次回の月例会は・・・

平成24年1月16日（月）9:30から旧村川別荘新館にて行います。工事の状況などについてご紹介したいと考えています。

今年も、みなさまのおかげでよいひととせを送ることができた旧村川別荘でした。どうぞ、よいお年をお迎えください。



旧村川別荘だより

58

月例会が開催されました。

あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

今年初めの月例会は、1月16日(月)に開催いたしました。工事真っ最中の村川にて、工事の様子を見学していただきながら、状況説明を行いました。

11月から始まった再整備工事は母屋、新館、庭園の3つのパートに分けて進められています。今回の見学会は工事が先行している母屋部分になります。母屋は大正10(1921)年に旧我孫子宿本陣離れを移築したと伝えられ、昭和40年代に大規模な改修(基礎をコンクリートブロック化、屋根を茅葺から瓦葺化、キッチン周りなど)がなされたようです。予算の都合もあり全面改修というわけにもいかず、明らかに腐朽した箇所の取り替え、後年の部分改修箇所の復旧を中心に進めています。

まず目に飛び込んでくるのがスライダーの

ような装置?!これは高低差のある村川の敷地内に重量のある砂利、コンクリートなどの資材を送り込むための「すべり台」



です。大工さんたちが創意工夫で設けたものです。母屋の周りに作られているのが雨落ち溝(雨水の排水管を埋設している)と犬走りです。旧村川別荘の建物には雨どいが無いため、雨はそのまま地面に落ちていましたが、建物周りの



土壌流出が著しく、礎石下の栗石や配管がむき出しになっていました。また跳ね上がった雨土が土台や柱、壁を濡らし、腐朽を進行させていたのです。



現在はまだうち放しコンクリートのままですが、表面を加工し、縁石を並べることによって景観に配慮したものにします。



次に壁の左官工事。昔の改修工事に際してペンキをぬってしまったところがあり、壁を傷めました。また地震で剥落したところもあり、土壁を塗り直し、漆喰を塗りなおしました。内部は墨をまぜた灰墨漆喰(ねすみ漆喰)で色あわせが難しいとか…。左官屋さんの腕が光ります。現在はかなり黒っぽいですが、時間とともに色が落ち着くそうです。



それから建物の要となる木工事。母屋は基礎ベースではかなり南西に傾き、さらに柱があちこちに倒れ込み、鴨居が自重で垂れ下が



っていました（なるほど雨戸や戸が開かないはずだ…）。とくに東側（トイレ付近）は山側からの湿気のためか腐朽も進んでいます。今回の工事では腐朽した木材は切除し、使える部分だけを残して「ほぞ」で継いでいく手法をとっています。かつては多くの大工さんが家の補修でこのような「ほぞ組み」で釘を使わずに建物を作ることができましたが、現在では



予め工場で切り込まれた（あるいは仮組みされた）部材を現場で組み立てるだけとなり、このような技術自体が極めて貴重となっています。また大工さんが腐朽した部材の形状を設計図もないのに写し取って、そっくり同じものを新材で作りました箇所もあります。



現在までに2つの発見がありました。ひとつはトイレ外側の舟板壁です。舟板壁は和船の部品を解体して壁に使うという、趣味的なもので、村川堅固の嗜好を示すものとして注目できるものでしたが、傷みが激しく、どのようにしようか悩みどころでした。大工さんがうまく壊れないように板を剥がし



てみると、裏側に「ハ」字型の切削痕と白い漆喰が付着した跡がありました。舟板壁の下には漆喰はありません。つまり、ここに来る前にどこかの建物で使われていた可能性がある、ということです。今回は舟板壁の下に防水シートを貼って、復旧しました。それと床の間の落とし掛けが「黒柿」という固くて希少な材を使っていたとのこと！紫檀や黒檀と同じく、趣味的でかなり高価なものです。今回の工事では虫が喰って使えなくなってしまった落とし掛けを新しい黒柿に取り替えました（古いものは今後の活用のため保存しています）。



大工さんによると、「この建物は転用材が多く、部材の状態も様々。移築したというだけでなく、あちこちから集められたものを使っているのではないか…」とのこと。部材を集めたのが本陣離れの段階なのか、村川堅固先生の段階なのかは分かりませんが、大切なのは本陣の建物かどうかというよりも（もとの本陣の建物構成が不明である以上）、堅固先生が気に入った古屋と古部材を活かして大正時代に建てたと言う事だと思います。考えてみれば江戸時代の建物に窓ガラスはありません。そういう意味では「村川堅固先生がこの建物を創建した」とも言えるのでしょう。



今回の見学会はここまででしたが、これから3月にかけて母屋の屋根工事、新館の出窓と床張り工事、庭園工事（上下の門、外柵、池、三角地など）が続きます。追って新たな事実が判明しだい報告したいと思います。

次回の月例会は・・・

平成24年2月16日（木）9:30から教育委員会会議室（水道局4階）にて行います。

旧村川別荘だより



平成 24 年 2 月 29 日発行

旧村川別荘市民ガイド事務局

我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課

歴史文化財担当：辻、工藤

〒270-1166

我孫子市我孫子 1684 番地

TEL:04-7185-1583 (直通)

E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.

月例会が開催されました。

今回は、教育委員会小会議室で行いました。会議室のような倉庫のような・・・(?)・・・狭いところで申し訳ありませんでした。

お休み中ではありましたが、たくさんの方のご参加を得て、勉強の場を持つことができ、感謝です。では、内容を紹介します。

大正期のレジャーと世相～別荘を考えるにあたって

1 なぜレジャーを見直すのか？

旧村川別荘や杉村楚人冠邸（もと別荘から住居に発展）などが設けられた大正時代、人々がどのようなレジャー（余暇）を過ごしていたかを知ることは、別荘のもつ価値や意味を知る上で非常に重要であると思われます。

2 大正期のレジャーの傾向

①格差社会を前提としたレジャーの違い

大正時代末の東京市の人口は約 200 万人（現在 23 区で 880 万人）で、納税額でみると上流層は 20 万人、中流層が 60 万人、一般層が 120 万人という構成で、統計によると上流層は競馬、スキー、ゴルフ、登山などをたしなみましたが、一般層は寄席、花見、散歩などで、あえて遠方や高額の出費を出してまでレジャーを楽しむ発想はなかったようです。自然とのふれあひも、上流層が逗子や葉山、大磯の別荘に行くのに対し、一般層は「隅田川、月島での水泳」がせいぜいでした。江戸以来、世界有数の都市であった東京には祭事（ハレの日）が多くあり、坪庭・盆栽といったミニマムな自然を楽しむ方法を知っていた市民はヨーロッパ的レジャーの価値観とは違っていただのかもしれない。大正から昭和にかけて全国から工場労働者が再編されていく過程でレジャーの発想

が認識されたのかもしれませんが。

②階層を越えたレジャー

大正時代は「映画」と「博覧会」の時代と呼ばれます。映画「ジゴマ」（怪盗もの、大正元＝1912）は真似をして死者が出るほどの人気を博しました。また大正天皇即位大典（大正 4＝1915 年）の熱気が冷めぬままに博覧会が上野と不忍池を中心に毎年のように開かれました。東京奠都奉祝博覧会（大正 6＝1917 年）は東京遷都 50 年を祝賀して行われたものです。また第一次世界大戦にさほど係わらなかった日本には平和な時代が訪れ、戦時物資の生産による重工業の進展により、多くの戦争成金を産みました。平和記念東京博覧会（大正 11＝1921 年、写真）では不忍池から水上飛行機が飛び立ち、博覧会が新しい技術や文化を伝えるだけでなく、新しい楽しみのカタチを提案する機会になったと言えます。



③レジャーの郊外化

農村からの人口流入が激しくなった大正時代は環境悪化に伴い、急速にレジャーが郊外化します。大正初期の頃は隅田川で水泳場が設けられていましたが、ほどなく月島、大森海岸、新子安、鎌倉など郊外へと変わります。村川先生も最初は隅田川畔に住まいを設けられ、洪水の恐れから目白に引っ越されたようですが、隅田川の水質の悪化も引き金だったのかもしれない。レジャーの郊外化に時を同じくして、東京からの鉄道も整備・電化が進み（横須賀線電化～大正 14＝1924 年、小田急江

ノ島線開通～昭和4＝1929年）、沿線に郊外住宅地や別荘が設けられます。別荘地として我孫子が開けてきたのもこの頃です。また私鉄沿線には二子多摩川園（大正11年）、多摩川園（大正14年）、としまえん・向丘遊園地（昭和2＝1927年）など遊園地が開かれました。

④レジャーの多様化

明治時代には上流層や学生など一部の人々しか触れる機会がなかったレジャーが新聞やラジオなどのマスコミを通じて広がりました。早慶戦や漫才、ローラースケートやビリヤードはこの時期に大きく国民に認知されました。

3 まとめ

大正時代は未曾有の好景気（バブル）と世界規模の恐慌（パニック）の時代と言えます。また大戦間の平和な時代にもかかわらず、政治や経済のみに着目すれば、大規模倒産、賃金や政治的権利を求めるデモ、要人の暗殺、小党分立による政治的不安定、といった暗い時代でした。しかし、東京を中心とした人々の暮らしは、階層に係わらず、旺盛な消費と飽くなき娯楽への追求に向けられていたようで、関東大震災（大正12＝1923）の翌年には多くの人々が花見や海水浴に興じている様子が見えます。遊びにかける人々のたくましさを感じずにはいられません。これからも多様な見方で別荘を捉えていく必要がありそうです。

連絡・意見交換など

・工事の進捗状況はいかがですか？

→母屋の木工事がほぼ終わった状態で、あとは雨落溝の化粧と砂利入れなどが残るのみです。新館の方はいま出窓の解体、奥の部屋のフローリングを施工中です。フローリングについては、ビニールシートが貼られてしまっているのを剥がして削り出しをし復元とも考えていたのですが、接着の状況がかなり強力でまた時間も経っていることから剥がしても下のフローリング材はもう使えないとのこと。もとのように復元はかなりの費用もかかることから今回は見合わせ、ただ、木のフローリングにすることとなっています。

ます。

庭の工事も着々と進んでおり、北門、南門の設置と飛び地のポケットパーク化がいま進んでいます。北側の境界は、鉄筋もあまり入っていない空洞ブロック造で危険があったことと、元は竹垣であったことからもとの竹垣に戻す工事をしています。いずれにしても3月いっぱい工事ということになります。

・いつごろ再オープンになりそうですか？

→先だってもお話ししましたが、昨年の台風で吹き飛んだ新館の銅板屋根の工事が24年度に行うこととなったため、手続きを考えると早くても着手が5月末。2月ほどはかかるという見込みです。その間のことも含め、どのようにリニューアルオープンをするか、いま協議中です。

・放射線の状況はいかがですか？

→現在、村川の中はそれほど高くなく、これを超えたら除染という基準である0.23マイクロシーベルトを下回る数字となっています。ただし、腐葉土のところはもっと高いと考えられ、これは別途処分予定です。

・新しくなった村川で、土器とか何か展示などスペースを設けたりなど考えていますか？

→土器などは何か特別展などテーマを設けて行う場合にはあるかもしれませんが、基本的には村川家の関連のもので展示を充実させていきたいと思っています。著書、手紙、そのほか夏子さんにもご相談をしながら展示を充実させたいと思います。

次回の月例会は・・・

平成24年3月15日（木）文京区へ市外研修に行きたいと思っています。文京区のふるさと歴史館では、「伯爵家のまちづくり」という企画展示が行われており、学芸員の解説もお願いしたら快諾いただいたので、これをぜひ見に来たいと思います。ぜひ、万障お繰り合わせの上、ご参加ください。

